

小野寺ルミ編

小野
寺ルミ
編

一月一〇日（火）

「小野寺さん、平和堂のところまで来たよ」

武藤さんが顎で信号を示した。

「あそこのマクドナルドまで」

「分かっている、分かっている。もうちょっとだけ頑張れ。笠井さんは、もう良いですよ」

私の背中に手を添えてくれている笠井さんは、首を振って「最後まで付き合います」と眼鏡の向こうの優しい目を細めて答えてくれた。穏やかで優しい雰囲気、笠井さんがめちやくちやイケメンに思える。などとぼんやり考えていたら、肩を貸してくれている武藤さんが、「さあ、歩いて」とグイグイ安威川の方へ歩かせてくれる。

二人のおじさんに支えられていると、だんだん足に力が蘇ってきた。信号がまだ二つ三つあったのに、あつという間に北摂つばさ高校前のマクドナルドに辿り着いた。

「本当にここで良いの？」

武藤さんはお店の中まで連れて行ってくれて、ゆつくりと私を座らせてくれた。笠井さんはコーヒーと水を持ってきてくれた。

「ああ、すみません。お代」

財布を探してカバンに手を伸ばしたのに、笠井さんは「いい、いらぬ」と言う。私の向かいに腰掛けた武藤さんは、笠井さんに両手を軽く合わせて、「付き合わせちゃって、すみません」と言った。

「いえ、どうせ帰り道ですし。沢良木の市営住宅あたりなんで」

「ああ、それで。じゃあ後は僕が見てるんで、また『にしじま』か『かどや』で」

「それじゃあ、よろしく」と頭を下げ、笠井さんはお店を出た。武藤さんは自分のコーヒーも注文してくると、再びどつかりと向かいに座った。しきりに水を飲めと勧めてくる。

「武藤さんも、すみません」

「いやいや、ウチの妹が無理やり飲ませちゃったでしょ。ペースも考えないで」

武藤さんの妹さん？

「夕方に帰った、高橋香織。アレ、実の妹」

「え、そうなんですか？」

そう言われると、目元というか、全体の雰囲気は似ていた気がする。武藤さんは通知のなったスマホを見て、申し訳なさそうな顔を私に向ける。

「ごめん、妻が『まだか』って送ってきちゃって」

「あ、私のことはお気になさらず」

「じゃあ、とにかくお水飲んでね」と言つて、武藤さんは自分のカップを持つた。奥さんよろしくお伝えください、と遠ざかっていく背中に伝えると、片手を上げた身振りが帰ってきた。

水が入った手元のカップを口元に運び、ぼんやりと外を眺める。デリバリーから戻ってきた店員さんは、ほんの数分で私服に着替えてバックヤードから出てきた。デリバリーの制服を着ている時は気がつかないけど、見覚えがあるような……。

「もしかして、ルミ？」

マクドナルドの店員さんはこちらをジッと見て私の名前を呟いた。その声にも聞き覚えがある。

「彩夏？」

彩夏は小さく頷いた。通行の妨げにならないよう、私の方へ体を寄せる。彼女に「今、実家？」と尋ねると、「そっちは？」と質問が返ってくる。否定も肯定もない沈黙の後、彩夏は「じゃあ」とお店を出ていった。

彼女と入れ替わりに店内へ吹き込んだ冷たい空気に、頭が少しずつ冴えてくる。とりあえずコーヒー飲んで、トイレ行こう。

初出 令和三年二月一四日 小説家になろうにて公開

一月三〇日（月）

隣に座る女性は、空になったグラスを握りながら、カウンターの上がら下げられていた紙を順番に見ていく。読み方がよく分からない銘柄が書かれた紙は、入り口の方までズラツと並べられている。後ろの方を気にかけてながら、身体をグツと引いて遠くの字を読もうとしている。

「もう一回、十四代もらおうかな」

隣で注文を待っている店員さんに、少し先の紙を指した。店員さんがメモを取る間に、私に注文を促した。まだ何口か残っているけど、同じ奴でいいかな。手元の小さなホワイトボードの文字を指し、「コレで」と告げる。「十四代と、東洋美人ですね」とメモした店員さんは、隣の女性、郁美さんの空のグラスとコースターがわりの小皿を回収すると、すぐに戻ってきて、背後の冷蔵庫を開けた。ズラツと並ぶ酒瓶から、注文した物を探ってきて、私たちの前で「こちらですね？」とグラスに注いでいく。

自分の分が注がれる前に慌ててグラスを空にして、今入れてもらった新しいお酒を一口嘗めた。郁美さんは、ナスの辛子漬けを掴む。

「ゴメンね。オバさんの徘徊に付き合わせちゃって」

「こちらこそ、わざわざご足労いただいて、すみません」

郁美さんに軽く頭を下げると、少しだけクラクラする。「いいの、いいの」と言いながら、彼女はスマートウォッチをちらりと見た。

「時間、大丈夫ですか？」

「全然大丈夫。まだ九時前だし、子なしの独身アラフォーだし？」

「そういえば、さつきもそんな話を聞いたつけ。」

「ルミちゃんこそ、こんな時間にオバさんとサシ飲みしてていいの？」

郁美さんの視線が刺さる。優しい言い方が余計に苦しい。お酒を口に含む。

「仕事が恋人ととかやってたら、十年ぐらいあつという間よ」

すぐこうなる、と郁美さんは自分を指した。嘲笑気味にお酒を飲み、残っている料理に手をつける。居酒屋で照明は少し落としてあるけど、十分綺麗に見える。容姿や性格の好みはそれぞれだろうけど、真剣に調理をする様と彼女の作るプロ

の味に、心もお腹も掴まれない男性が一人もいないとは思えない。

「私は、素敵だと思います」

郁美さんは一瞬動きを止めて、私の方を見た。

「年齢なんて聞かなぎや分かんないし、素敵な生き方だと思うし」

郁美さんは、「ありがとう」と呟くように言った。自分のグラスを傾け、日本酒を一口飲んだ。

「ルミちゃん、いい子だね。香帆さんも、いいお母さんだわ」

郁美さんはニツと歯を見せて笑うと、グラスに残ったお酒をグツと飲み干した。私のグラスを見て、「次、何する？」と言う。

「気分いいから、奢っちゃおう。選んどのいて」

そう言いながら席を立つと、すぐ後ろのトイレに入った。グラスのお酒は、まだたっぷり残っている。隣に置いた水を飲み干し、お冷やのおかわりをもらう。

店員さんが、水がたっぷり入った大きなグラスを交換すると同時に、郁美さんがトイレから戻ってくる。彼女は椅子に戻りながら、「決めた？」と訊いてくる。

「いや、もう……」

目の前でバツを作る。

「そう。遠慮してない？」

私が頷くと、彼女は自分の水をゆっくり飲み飲んだ。

初出 令和三年二月一九日 小説家になろうにて公開

二月二〇日（月）

今日は朝から株式会社Zサイズさんのオフィスにお邪魔して、先日リモートで参加した打ち合わせの続き等々を行う予定になっている。Zサイズさんの主要取引先、アンドウデザイン事務所さんも含め、年度末の繁忙に加え、近々始まる統一地方選挙関連の仕事も加わる。

引退の噂もあった哲朗さんのお父さん、原田一朗氏も次の四期目を目指して出馬する方向で調整しているらしい、と里帰りしたばかりの哲朗くんがタレ混んでくれた。ウチの株式会社Zライフも、主に紙媒体、ライター関係、ポスティング周りで忙しくなることは間違いなさそうだ。

「へー。結構、伸びてるんですね」

先に到着されていた康徳さんは、哲朗さんの後ろで彼のモニターを見ながら呟いた。

「JKパワーだったり、安藤さんも紹介してくれたり、色んな要因があるみたい」

武藤さんは印刷した資料を持って、私が通された応接スペースにやってくる。

哲朗さん、康徳さんもやってきて、武藤さんが自分の端末とモニターを繋いでいる間に、哲朗さんは来客用の紅茶を出してくれた。

「森田さんはストレートでもいいけど、小野寺さんにはフレッシュね」

「そうでした、すみません」と哲朗さんはフレッシュとマドラーも用意してくれる。

「森田さんも小野寺さんも、月曜の朝からごめんね。来週には三月突入しちゃうし、この時間しか空いてなくなつて。芽衣さん、亜衣ちゃんたちにも謝つといて」

武藤さんは顔の前で両手を合わせ、康徳さんに「申し訳ない」と頭を下げた。

康徳さんは「いえ、大丈夫です」と答える。

「で、申し送り事項としては通常の業務に加えて、イチロウさんの選挙関連が来る見込みです。あとは年度末の駆け込みが去年、一昨年よりちょっと多そうなんです、もしかしたらZライフさんにもお力添えいただくかも、つて感じですよ」

武藤さんは淡々とモニターの資料をめくっていく。今年に入ってから案件の量も増えている。このところ滞っていたりニューアル案件なんかもやつぱり増えて

いるらしい。

「その上で、森田さんのお姉さんの件と、コビトカバ फिल्मの件と、朋子さんからの無茶振りの件が飛び交ってる、と。順番に、フードトラックの件から行くか。どんな感じ？」

康徳さんが、「独立に向けて具体的な計画立案には至っていない」と話した。案件、ビジネスになるかはまだペンディングだ、と。

「差別化がまだ弱いというか、市場調査が不十分というか」

「小さくトライアルするにしても、パンチが足りない気はするよね」

「あの……」

私の拳手に、武藤さんが発言を促してくれた。昨日、敬子さんからもらった「医療用テント等を転用する案」を伝えてみる。

「トラックで出向きながら、簡易な出店っぽい空間演出もできれば、テキ屋さん代わりに色々進出できないかなあ、とか思ったり……」

「でも、飲食スペースも含めてデコるって、結構やつてるよね」

康徳さんの突っ込みがググッと刺さる。確かにコーヒースタンドとかタピオカ、鯛焼き屋さんでも、簡易テントと折り畳み椅子とかは見たことがある。私が意見をまとめている間、武藤さんはジッと考え込むと、

「いや、悪くないんじゃない？ トータルプロデュースできれば差別化できるかも」

武藤さんは、「ほら、安藤さんのところ店舗設計もやってるし」と補足する。話を聞いているだけに見えた哲朗さんが、何かを思いついたように口を開く。

「一輝さんも、賞取られてましたよね？ トラックの方は」

「ウチの親父が整備士だ。ツテもあるかも」

厳しそうな表情をしていた康徳さんも、武藤さん、哲朗さんのやり取りに段々エンジンがかかって来たような顔になっていく。プロデュース、ブランディングまで噛み合えば、メディア事業のウチにもいい話になるかもしれない。

ふと時計を見ると、まだまだ一〇時半。午後からオフィスに戻って事務作業のつもりだったけど、これからの予定はリスケできたかな……。

三月五日（日）

今日までだった漫画を「TSUTAYA」で返却。借りて帰りがかった目当ての漫画は貸し出し中で、空振りの心をなんとかしようと斜め向かいのミスドに足を踏み入れた。窓に貼られた少々ぼつちやりなピカチュウ、フシギダネのシールが私も欲しいんだけど、どこで手に入るかは分からない。とりあえず、毎年のカレンダーで我慢する。

「あれ、小野寺さん」

夕方の遅い時間、ショーケースに欠品もチラホラ見えるレジに並んでいると、隣の席から聞き覚えのある声がかげられた。ちよつぴりよそ行きっぽい浪川瑞希さんと、随分ホクホクした表情の哲朗さんが座っていた。仮面ライダーに似て、見慣れないヒーローグッズっぽいものも、その隣に鎮座している。

「どうも」と軽く挨拶し、前が開いた列を詰めた。浪川さんが物珍しそうに、私の頭から爪先まで眺めている。こちらは知り合いに会うとはあまり想定していない、着古したユニクロ一式。ヒールのない靴、手抜き化粧も相まって、ちんちくりん加減、幼さが加速している。

彼女の視線を気にしていると、レジの向こうから「お次の方どうぞ」と声がかかった。ポンディングとオールドファッション、期間限定の新作も少しお得になる組み合わせで詰めてもらう。

会計を済ませ、「じゃあ、また」とお二人に挨拶して店を出た。外から二人を見ると、彼はとても楽しそうに話し込んでいる。非常に、眩しい。逃げるように「TSUTAYAの隣」で停めた自転車をピックアップして、そのまま阪急の駅の方へ向かう。

陽が落ちるとまだまだ肌寒い。自転車には跨らず、荷物をカゴに入れて押し歩く。商店街を抜け、茨木市駅の一階を通過してバスロータリーに出る。駅前の横断歩道を渡った少し広いところで、自転車を跨った。前後の安全を確認して、ゆっくりと市役所の方へ向けて走り出す。

私と同じように自転車のカゴにスーパリーの袋を入れた女性たちが、前から後ろから通り抜け、歩道の上をまばらに埋めている歩行者の間を上手に縫っていく。猛

烈な勢い鈴を鳴らして駆け抜けていくオバさんたちもチラホラ見える。

夜の飲食店は今日はほぼお休み。昨日までは飲み歩いてた人たちも、今日は大人しく家で飲むのだろう。さっきのイオンで、大きなボトルを買って帰ったオジさんもいたなく。あのウイスキーはどう飲むだろう、と目の前に気をつけながらも想像が捗る。

綺麗になつた茨木神社、立派な茨木童子の前を通り、交差点を二階渡った。市役所の前を南へ進み、業務スパーの混雑ぶりを眺めて右に曲がる。カレーの匂いに心惹かれながら、茨木駅の方へ自転車を進める。

駅前の駐輪場で一回停めなれないと思っていたら、見覚えのある女性が駅へ向かって歩いてる。後ろに気をつけながら自転車を脇に寄せ、サドルから降りた。自転車を押して、女性の隣までかけていく。自転車の音で気がついた女性、郁美さんがこちらに振り向いた。

「あら、ルミちゃん」

「もう帰るんですか？」

郁美さんは自転車のカゴを見て、「あら、差し入れ？」と言った。私が頷くと彼女は「ごめんなさいね。明日も早くつて」と答えた。

「また今度、ゆつくりお茶しましょ」

郁美さんは「お母さんによろしくね」と言い残し、改札へ向かうエスカレーターに乗り込んだ。彼女の背中をゆつくり見送りながら、カゴの中のドーナッツをどうするか、思考を巡らせた。

初出 令和三年三月二日 小説家になろうにて公開

三月三十一日（金）

いつもの我が家では信じられないぐらい、あつちにもこつちにも煌々と灯りがついている。微妙な緊張感を保ったまま、いつもはしない「脱衣所での着替え」を済ませ、適当にほっぽり出しておく見られたくないものはしつかり隠して、鍵を開ける。

「へー。それが部屋着？」

ハンガーにかけるパンツを抱えてキッチンを横切ると、当たり前のように食卓でお茶を飲む透に声をかけられた。一瞥だけくれて、すぐに自分の部屋に入った。キッチンから呼びかける声が聞こえてくるけど、反応すればするだけ調子に乗るのは分かっている。ガン無視を決め込んで、形を整えてパンツを掛ける。消臭スプレーも振っておく。

この灯りは落としてからキッチンに向かう。そつちを見ると、透が椅子から立ち上がるところだったから、ちよっぴり冷や冷やした。後ろ手に外から静かに鍵をかけ、何事もなかったかのようにキッチンで手を洗う。透はそれを横に突っ立って眺めている。

「何？」

タオルで手を拭きながら、透の顔を見上げた。「いや、別に」と言いながら、彼は私を頭の前から爪先まで、じっくり上から舐めるように見ている気がする。

そこを退け、と手で示し、透に前を開けさせる。食器棚からグラスを取り出し、冷蔵庫から五〇〇mlのビール（正確にはリキュール）を取って食卓に腰を下ろした。

「オレももらつていい？」

「勝手にどうぞ」

彼は今までお茶が入っていたグラスを空けると、そこに私のグラスに入りきらなかつた残りのビールを注いだ。美味しそうに一口飲んだ。

「何？」

「透もビール飲むんだなあ、と思って」

「何だよ、それ」と言いながら、彼はもう一度、グラスに口をつける。ビール

を飲む姿どころか、今着ている仕立ての良さそうなスーツ姿も見慣れない。どうしても、坊主頭で野球部のユニフォームを着ていた姿を重ねてしまう。

「洗顔はいいのか？ お肌の曲がり角はとつくに過ぎてんだろ？」

「あんたが帰ったらするから、お構いなく」

透は、私のグラスが空になりそうなところで冷蔵庫の前に立つ。「もう一本いる？」の仕草に頷くと、流れるような手付きで私のグラスと自分のグラスに半分ずつ注いだ。

「帰るよね？」

「どうしよつかな。久々にココでお泊まりするのもいいな。思い出のベッドで一緒に寝るつてのも、アリだな」

「はあ？」

こいつ、今年の年賀状に愛娘との写真を載せてたのに……。

「冗談、冗談。コレ飲んだら帰るよ。遅くなりすぎると嫁にも怒られるし」

透の、人を馬鹿にしたような笑いに何度ブチ切れてきたことか。でも、私はもう大人。そんなムカつく顔で一々腹を立てないし、煽り文句も華麗にスルーしてやる。腹式呼吸で苛立ちもしつかり身体の外へ吐き出した。

「ルミはルミのままだな。元氣そうで良かった」

彼はグラスに残ったビールをグツと飲み干した。

「じゃあ、オレはコレで。また飲もうぜ」

透は席を立ち、椅子にかけていたジャケットを羽織り、コートを腕にかけた。カバンをしっかりと握って、玄関に向かう。彼が出ていくと、滅多に人が来ない我が家にまた戻る。

「また飲もうぜ」のセリフに若干イラつきながら、普段より灯りの多い家で独りになると思うと、ちよつぴり怖かった。

初出 令和三年四月二九日 小説家になろうにて公開

四月六日（木）

香織さんと郁美さんという、私には珍しい組み合わせでハッピーアワーな時間帯からグラスを傾けている。お店の中をパツと見回しても、マトモな社会人と言われそうな人はほぼいないように思える。

学生さんの新歓コンパつぼい賑わいを表向きは温かい目で見守りながら、時間制限なんて気にしないで飲みたいものを飲み、食べたいものを食べ、精神の安定を図っている。

郁美さんも学生の団体さんが気になるようで、時折あがる大きな声に視線をやりながら、お替りのビールを頼んでいた。

「先週は大変だったんだね……」

香織さんの優しい声に、つい涙がこぼれそうになる。

「これがその透つて奴？」

郁美さんは私のスマホを触り、透が写っている写真を表示した。先週ぼったり会って、半ば押し切られる形で家までついてきたときに無理矢理撮らされたツーショット。すぐに消そうと思ったけど、何かあつた時の証拠として残してある。

「幼なじみでこの顔なら、色々あるよねえ」

「確かに、モテそうな顔してる」

香織さんもスマホを覗き込み、郁美さんの意見に賛同する。確かに器量は悪くないし、スポーツもそこそこできたけど――

「性格は難あり、と」

郁美さんの呟きに、首を大きく縦に振る。香織さんは目を細めて、私の顔を見る。

「でも、だから気になるよねえ」

香織さんの指摘に、郁美さんは「そっか、そうかも」と頷いた。「で、本気になつて手を出すと、こうなっちゃう」と、彼女は自分を指した。

「二つバツをつけてくも、ちつとも大人になんてならない」

香織さんはちよつぴり節をつけて言うのと、肩を竦めた。

「うわっ、懐かしい。明日も仕事がなかったら、このままカラオケだったのに」

郁美さんが「ねえ？」と同意を求めるように私の顔を見た。一人でキョトンとしていると、香織さんが「ルミちゃんは世代じゃないから、分かんないって」と郁美さんに言った。

「そっか、そっか。『るろ剣』も、佐藤健だもんね」

『るろ剣』は佐藤健でしょ？ 普段からそんなに接点がなさそうなお姉さま方が、二人だけで仲良さそうに話しているのを見てみると、だんだん酔いが覚めてきた。透の件を愚痴ってやった高揚感が、次第に遠のいていく。

お皿にちよつとずつ残っていた料理を二つ、三つ口に運び、レモンサワーをグイッと飲み干した。空いたお皿を下げに来た店員さんに、ハッピーアワーが終わる前にもう一杯同じものを頼んでおく。

少しでもストレス発散になればと、たまたま一緒だった二人を食事に誘ってみたけど、失敗だったかな？ このところ、妙に上手くいっていない気がする。モヤモヤをぶつけられるような趣味、あつたかな……。

もう香織さんも郁美さんも興味がなさそうな私のスマホを回収し、二人の会話を気かけながら、LINEを開いた。退勤後の仕事の連絡は特にならないけど、彩夏からの新着が届いている。

——また今度、ダンスしない？

高校のダンス部を卒業して以来の、彩夏からのダンスのお誘い。マトモに身体を動かさなくなつて久しい今日この頃、インドア趣味が充実してしまつてオバさん化する拍車がかかりつつあるけど、ちよつとずつ慣らしていくのは悪くないかも。新しく運ばれてきたキンキンのレモンサワーを、景気付けにグビツと飲んだ。

初出 令和三年五月二日 小説家になろうにて公開

四月二十六日（水）

すっかり夜も深まった時間帯に、水尾東公園のベンチで身体をほぐすことになるとは思いも寄らなかった。もうそろそろ半月になりそうな夜空を見上げながら、「乳酸よ、出ていけ」と強く念じながら、念入りにストレッチする。

「ごめん、遅くなっちゃった」

彩夏が、裏手の水尾図書館の方からではなく、表通りの方から、ファミリーマートの袋を提げてやってきた。

「フレスコ、九時までのね。そっちのファミマまで行ってたら、遅くなりました」

私はお尻を浮かせて、彼女の座るスペースを確保する。彼女はビニール袋から「ファミマ限定」と書かれた五〇〇㉔缶を取り出して、私に差し出した。彼女も自分の分を手にとって、ベンチの腰を下ろすや否や早速開ける。吹き出しかけた泡を口から迎えに行つて、乾杯もなしにいきなり始めてしまった。

私も置いて行かれないように、缶を開ける。向こうが落ち着くまで一応待つて、遅まきながら「乾杯」と缶を軽くぶつけた。グツと喉に流し込むと、だんだん夜も暑くなってきた時期に嬉しい冷たさが、程よい刺激や苦味とともに駆け抜けていく。

「ルミとここで缶ビールを傾げるなんて、夢にも思わなかったな」

「アラサーにもなって、花見でもないのに月を見ながら外飲みなんて、私も想像してなかったな」

「アラサーって」と彩夏は笑った。彼女が隣にいなかった学生の頃は似たようなところでよくやったけど、最近はこういうの、やってなかった。

ぼーっと目の前を眺めていると、案外、交通量はそれなりにある。その割に、背後に広がる団地、住宅街は恐ろしくらしいの静けさが広がっている。私の家も、彩夏の実家も、この静けさの中に含まれている。

「ゴールデンウィークは、なっちゃんどどつか行くの？」

さつきまで背中に感じていた重み、温もりを思い出しながら、彩夏に訊いた。

彼女は「なくんにも決めてない」と言った。

「仕事もいつぱいもらっちゃったし、まだまだ勉強しなきゃいけないこともあるし」

仕事も勉強も依頼したのは、私だったわけ。在宅でも稼げる時に稼いでもらおうと、比較的簡単な仕事をお願いしたつもりだったけど、彼女の「頑張ります」の熱量に甘えて、やりすぎちゃったかもしれない。

配慮が足りずに申し訳ないなど、後頭部を搔いていると、彩夏は「でもね」と明るい声で言った。

「お母さんと一緒に、沢山お出かけするんだって。森田さんのところとも、遊ばせてもらう約束しちゃった」

「へえー。それは、凄いね」

そういえば、芽衣さんのところの亜衣ちゃん、同い年ぐらいだったわけ。彩夏ママもまだまだ若いし、孫とお出かけを口実に、色んなところへ繰り出しそうだけだ。

「お仕事紹介してくれて、本当にありがとう」

彩夏は勢いよく、深々と頭を下げた。

「気持ちをよく分かったから、もう頭上げて。お願い」

彼女の体を揺すって元に戻るように促すものの、彩夏は彩夏で身体をガチッと固めて、頭を下げたまま戻る気配はない。私が揺さぶりを強めると、彩夏の手中にあつた缶から、ビールが飛び出した。勢いよく彩夏の顔に直撃し、彼女の顔面がビシヤビシヤになる。

彩夏はやつと顔を上げ、無表情で私の方を見る。無言のプレッシャーに、「ごめんなさい」と小さく謝ると、彼女はプツと吹き出して笑った。満面の笑みを浮かべる彼女に、私はタオルハンカチを差し出した。

初出 令和三年五月八日 小説家になろうにて公開

五月五日（金）

居酒屋なのに連休中ということもあつてか、二階には小さな子供を伴った家族連れもいた。他の席にも団体さんっぽい人たちがチラホラいる。彼らは食卓の真ん中に置かれたコンロで貝やエビを焼きながら、楽しそうに談笑していた。

そういう私たちも二つの卓に分かれ、団体で座席を占有している。もつとも、楽しそうにしているのは目の前にいる男一人だけで、なんとなく重たい雰囲気、鬱々としたトーンが漂っている。

一人だけ楽しそうな男は、隣に座る女子に声を掛けた。

「君も、向こうの席じゃなくていいの？」

メニューを握り締めたまま隣のテーブルをジッと見ている女子、瑞希さんは声をかけた男、透の顔を見ることなく頷いた。彼女はサッとメニューに視線を戻した。私は透に咎めるような視線を送るも、彼は悪びれる様子もなく、私に向けて肩を竦めた。

「で、なんであんたがいるの？」

「幼馴染みが若い男と居酒屋なんて、気になるだろう？ モテるみたいだし」

透は横目で隣のテーブルに視線を投げた。あちらのテーブルは確かに賑やかだけれども、渦中の彼はあまり嬉しくはなさそうに見える。助けを求めるような視線がこちらに向いているような気もするけど、それを迎えるのは瑞希さんの冷やかな厳しい目。こんな怖い表情もできるんだ。おまけに、どこか可愛らしさも隠れているというか、キツイ表情を作っても美人さんに見えるのは単純にすごいというか、羨ましいというか、ちよつぴりズルいとも思ってしまう。

「ま、冗談だけ」

透は店員さんが運んできたドリンクを受け取り、私のグラスと形だけの乾杯を済ませると、グツと飲んだ。隣の瑞希さんはノンアルコールのジンジャーエールを両手で握り締めたまま、チビリチビリと飲んでる。

せっかくのビールを楽しみに茨音へ出かけたのに、なぜかステージに出る羽目になってバタバタしている間にビールが売り切れてたのが悲しくて、打ち上げ代わりに居酒屋へ駆け込んだのに、よく冷えたビールをグーッと飲んでお気楽にプ

ハーッとする雰囲気じゃない。まあ、カラカラの喉を潤すのに、そんなシチュエーションなんて関係ないんですけど。一口で半分以上が消えてしまった。

透は通りかかった店員さん呼び止めて、ビールのお代わりを頼んでくれた。そんな彼をジッと見て、もう一度「なんであんたがいるの？」と訊いた。

「嫁、子供はほつといていいの？」

「ほつといてつていうか、向こうは一昨日から実家に帰ってるよ」

「で、一人だから幼馴染み相手に浮気しようつて？」

「そういうこと」

彼は相変わらず楽しそうにニヤニヤしながら、まだ誰も手をつけていないポテトフライに手をつけた。ケチャップとマヨネーズをたっぷりつけて口に運ぶ。隣の座っている瑞希さんは、隣のテーブルをジッと見据えたまま鶏の竜田揚げに食らいついた。サクサクの衣と彼女の歯が醸し出す力強い咀嚼音に、「哲朗くん、逃げて〜」と心の中で叫ぶ。

「それぐらいのメイクだと、十歳ぐらい若く見えるな」

透は私の顔をジッと見ながら、ボソツといった。ひよんなことからステージに立った後、パパッと汗を流して簡単に目元を直したぐらいだけど。

「えっ、まだ制服いける？」

「冗談、冗談。ルミが子供っぽいだってたわ」

透はプツと吹き出した。お腹を抱えて盛大に笑う。こいつ、マジでムカつく。どんな仕返しをしてやろうか、頭の中でこねくり回しながら、店員さんが運んできた新しいビールを口に含んだ。

初出 令和三年五月一四日 小説家になろうにて公開

五月一六日(火)

我が家の食卓でノートパソコンと何やら印字された紙を広げながら、香織さんと彩夏とが二人でペンを片手に額を突き合わせている。宿題を見る親子、いや歳の離れた姉妹のように見えなくもない。

私はそれを眺めながら、コンロの前に張り付いている。火力の強い方にはたっぷり水を張った大きめの両手鍋。弱い方にも似たような片手鍋でお湯を沸かし、換気扇の下で何も聞こえないなりに、二人のやりとりをジッと見つめてしまう。

火の熱さに少々ぼんやりしていると、冷蔵庫に貼り付けたキッチンタイマーが唸り出した。慌ててアラームを切り、両手鍋のガスを切る。シンクには既に大きめのザルをセットしておいた。取手の熱さに注意しながら、三人分のパスタをザルの中へ移していく。

「あら、バターないんだ」

私の動きをしっかりと見ていた香織さんは、冷蔵庫を開けて言った。彩夏も彩夏で、食卓の上をザッと片付け、片手鍋のガスを切る。香織さんは「ないなら仕方ない」とドアポケットのマヨネーズを取り出し、湯切りをしたパスタに投下した。彼女はパッとマヨネーズを仕舞う。私はパスタにマヨネーズを絡め、いつかのパン祭りで交換した白いお皿に三等分していく。彩夏は引き出しから菜箸を探し当て、片手鍋のお湯の中にいたパスタソースのパウチを三つ、取り出した。キッチンペーパーで表面の水滴を軽く拭いてくれる。

「香織さんは、どれにします？」

「二人が先に選びなよ。残ったのでいって」

「じゃあ、彩夏が先に選んで」

三つとも全部バラバラの、賞味期限が少々怪しいレトルトソース。近くのスーパーで適当に買ってきて、そのまま仕舞い込んでいたのを引っ張り出しただけの、適当ご飯。彩夏は和風きのこを、私はイカ墨を選び、残りのミートソースが香織さんという結果に。パウチを開け、サイズが微妙に違うカトラリーを食卓に並べる。三人で「いただきます」と声を揃えた。

「他人ん家でこういうランチも、たまにはいいね」

香織さんは心底美味しそうにミートパスタにフォークを突き立てている。

「こんなモノしか出せなくて、すみません」

「全然気にしないで。パスタに麦茶とか、サイコーじゃない？」

香織さんは隣に置いた麦茶を豪快に飲んだ。ミートソースとのマリージュを、本気で楽しんでるように見えてくる。

「でも、色気がない冷蔵庫だわ。バターもマーガリンもないなんて、朝からちゃんと食べてる？」

学生の頃から、朝からしつかり食べる方ではなかったけど、社会人になってからは、ほとんど食べなくなっている。

「朝ってどうか、自炊もほとんどしてないでしょ」

彩夏が横から香織さんに加勢する。香織さんは大きく頷いて、「うん。アレは酒飲みの冷蔵庫だわ」と断言した。

「一人暮らしのアラサー女子だって、自炊ぐらいしますよ」

「へー。本当に？」

香織さんも彩夏も疑いの目で私を見つめる。彩夏はまだしも、香織さんにはさっきの手際で色々バレた気もする。大して汚れていない水回りにコンロ、五月も半ばというのに、換気扇だって比較的綺麗なままだし、それに引き換え、お酒の瓶や缶は見えるところに積み上がっている。

「こ、今度、ペペロンチーノぐらいご馳走しますよ」

「ペペロンチーノぐらい？ 聞き捨てならんぞ」

香織さんの目に何かが宿る。悪戯っぽい表情がかえって恐怖を煽る。どうやら私は何かを誤ったらしい。ほぼ初対面のはずの、二人のシングルマザーに、謎の結束力で追い詰められている。なけなしの私の女子力をかき集めても、太刀打ちできそうになかった。

初出 令和三年五月一七日 小説家になろうにて公開

六月一二日(月)

隣で自転車を押しながら歩く哲朗くんから、言葉が少なくなつてどれぐらいの時間が経つただろう。ある程度見知つた関係とは言え、暗がりの中を二人並んで黙々と歩き続けるのは、それなりに緊張感がある。

時折彼の方を見るものの、表情は至つて平常、特に何かを気にしている素振りはない。どうやら、私が一人、疲れも相まつてテンションがちよっぴりおかしくなっているだけらしい。

もう、目の前に平和堂の看板が見えてくる。前回、武藤さんと笠井さんに送つてもらつた道まで帰つてきた。交差点の向こう側に、確かたこ焼き屋さんがあつた気がする。あそこは、割と遅くまでやつてたはず。

「お腹空いてるよね。たこ焼きじゃ物足りないと思うけど、食べる？」

哲朗くんの顔を見上げる。彼は少々思案するように上を見上げ、少しだけ間を置いて「じゃあ、いただきます」と微笑んだ。

遅くまで残つて手伝つてくれたお礼に、と散々連れ回しては玉砕してきたのに、なんと爽やかな笑顔を見せてくれるのだろう。類を見ない優しさと穏やかさ、最近はメキメキ頼り甲斐も出てきて、非の打ちどころがなさすぎる。

彼の少し前を歩いて、交差点を渡る。お店の前まで先導し、往来の邪魔にならないところでちよつと待つてもらおう。

「たこ焼きを、一五個入りを一つと、八個入りを一つ。それから、豚玉と焼きそば並盛りも」

自分の晩ご飯も差し込みつつ、注文と会計を済ませる。作り置きを少し温めてもらつて、袋も二つに分けてもらつた。粉もんがたつぷり入つた方を哲朗くんに差し出す。彼は袋の中を覗き込みながら、「こんなに、いいんですか？」と言つた。

「コレぐらいペロツと食べれるでしょ？」

彼はまた少し間を置いて、考えている。一人納得したらしく、小さく頷くと自転車の前カゴに袋をそつと置いた。

「で、君はどうするの？」

南茨木で行きたかったお店は定休日、立ち寄りたかった焼き屋さん。早々に閉まっていて、「送ってくれる」という言葉にも甘えながら散々連れ回してきたけど、お礼という意味ではミッションをクリアした。

「ココまで来たなら、家までもうすぐだし。あんまり遅くまで連れ回すのもアレだし」

私はココから五分も歩けば家に着くけど、彼は自転車で五分ぐらいの道を帰らなきゃならない。そろそろ二時半。目の前の通りを茨木市駅の方まで上がっていけば、そんなに迷うことなく帰り着けるはず。

「お一人ですもんね。了解しました」

彼は何かを勝手に察知して、独りで納得したように頷いている。

「ご自宅はどちらでしたっけ」

私は信号の向こうを指した。

「じゃあ、途中まで」

彼は自転車のスタンドを上げ、横断歩道の前まで行った。私は前後左右を確かめて、彼の背中を追いかける。パチンコ屋の横を通り抜け、平和堂の前までやってきた。

「私はココで」

私は足を止め、少し前を歩く彼の背中に声をかけた。彼は灯りが灯っていない平和堂の方をチラッと見て、自転車に跨りながら、私の方へ振り返った。

「じゃあ、おやすみなさい」

私も「おやすみなさい」と返すが、彼は颯爽と自転車を漕ぎ出し、スーッと遠ざかっていく。去り際もめちやくちや決まってるじゃない、と思いつつ、私は独りでちよつと暗い住宅街に足を踏み入れた。

初出 令和三年五月二四日 小説家になろうにて公開

七月一五日(土)

身体が左へ回転するのを感じて、目が覚めた。今の今までどんな夢を見ていたのか、思い出せそうで思い出せない。

それにしても、暑つついなあ。寝起きの頭に、蒸し暑さが重なって、ますます思考が働かない。タオルケット、出したっけ？ その前に、洗濯機の水着、干さない。畳に手をつけて上体を起こす。

枕元に置かれたメモ書きによると、彩夏とお嬢ちゃんは既に帰宅したらしい。お昼前から五十鈴の市民プールに行つて、帰ってきてから遅めのお昼を食べ、タオルと水着を洗濯機に放り込んでから、三人で川の字になつて昼寝したんだっけ。で、いま何時？

窓の外はまだ少し明るいけど、一九時？ 適当な晩ご飯を食べようにも、乾麺も冷凍ご飯も切らしてたな。今からご飯炊いて、色々片付けながら何か作るのも面倒くさいなあ。

でも、このままゴロゴロしても暗くなるだけだし、のそのそと壁に手をつけて立ち上がる。まずは水分補給とお昼の後片付け。冷蔵庫を開けると、ポットにたっぷり入った麦茶が冷えていた。買い置きのお素麺を食べ切った痕跡も、綺麗に片付けられている。

麦茶をコップに注ぎ、立つたままグーッと飲み干すと、その冷たさに頭が少しずつ冴えてくる。もういっぱいコップに注ぎ、ポットを冷蔵庫に戻しながら半分飲む。コップを食卓において、脱衣所の洗濯機のところまで行くと、お風呂場の突っ張り棒に、水着とタオルとが干してあった。

さっきのタオルケットも、もしかして彩夏？ 何から何までやつてくれるなんて、なんてよくできた人なんだ。コレが独り身と子を持つ親の差？ 帰るときに起こしてくれればよかったのと思ったけど、それも彼女なりの優しさか。

正体不明の敗北感に苛まれながら、飲みかけのお茶を飲み干した。LINEを立ち上げて、「今起きた。ありがとう」とメッセージを打ち、この後どうしようか思考を巡らせる。

寝汗は気持ち悪いけど、お風呂場の洗濯物はもう少しそのままにしておきたい

し、今からシャワーを浴びて外に出たとして、寝る前にもう一回シャワーを浴びるのもちよっぴり面倒臭い。

仕事用靴の底から汗拭きシートを取り出し、首回りと腕まわり、手が届く範囲をサツと拭いた。パツと顔を作って、多少着替えて食べに行くのも面倒だし、久々に吉野家のテイクアウトでもしようかな。

学生時代を買ったティアドロップのサングラスをかけたなら、スッピンでもなるとかなるでしょ。知り合いに会ったとしても、やり過ごせるさ。

そうと決まればお出かけ用のカバンに財布を入れ、洗面所で顔だけ洗って変な線がついていないか確かめる。お茶を飲んだコップを洗って片付けると、戸締りを確認して自転車の鍵を掴んだ。

泥除けに貼った学校指定のシールが外れただけの、十年選手の自転車に跨がり、近くの吉野家へ向かう。たこ焼き屋の前の交差点を南茨木の方へ曲がれば、あつという間に到着だ。

「おう、ルミじゃないか。また会ったな」

駐輪所に自転車を入れ、鍵をかけていると後ろから声がかかった。そちらを振り返ると、今日のプールでも遭遇した透が、持ち帰り用の袋を提げて立っていた。

初出 令和三年七月二〇日 小説家になろうにて公開

七月三〇日（日）

シャワーも浴びて、スキンケアも済ませた。さつさと歯も磨いて、ベッドに入ってもいいんだけど、寝る前に一本ぐらいは開けたいところ。今日も一日暑かったけど、日中は仕事で飲めなかったし、打ち上げも早々に切り上げてきちやつたから、ビールを飲みたくて仕方ない気持ちだけがズーツと残ってる。

振替で明日は休みにしてもらったけど、今日のビールは今日のビール。明日は明日で飲むんだろうけど、それは明日の私が決めればいい。一昨日から冷蔵庫にいた五〇〇ml缶を取り出して、えいやとプルタブを起こす。

クーラーの効いた部屋で飲むビール、一日外にいた分と、長々とお預けをくらっていた分とで、極上に美味しくなっている。一気飲みは良くないんだろうけど、グラスに注いだ量の半分以上、三分の二がなくなった。軽くなった五〇〇ml缶を傾け、残りの液体を注ぎ込んだ。

お風呂上がりで乾いた身体に、五〇〇mlは瞬く間に吸い込まれる。一本だけと思っていたけど、もう一本ぐらいならセーフだろう。二本目はゆつくり飲もうと心に誓い、新しい缶を冷蔵庫から取り出して、空になったグラスへ注いだ。

ダイニングで食卓に座り、一人でこのままストイックにビールと向き合っていると、またあつという間に飲み切ってしまう。何かつまむのは控えるとして、とりあえずスマホでも持ってこよう。

自分の部屋に置いたカバンから、スマホを取り出して食卓に戻る。彩夏から「おやすみ」と通知が届いていた。LINEを開いて、「おやすみ」と返事を返した。

念のためにチャットツール、メールも開いてみたけど、お風呂に入る前に見たときから、目ぼしい更新はなさそうだった。武藤さんや哲朗くんは、まだあちらのオフィスで賑やかにやっているらしい。

前々から明日は休みの予定だったけど、一応カレンダーにも目を通す。私宛のスケジュールは登録されていない。気になるインタビュ어가お昼前に設定されているけど、この時間帯は一応動けるようにしておいた方がいいのだろうか？ 何事もないと思うけど、いつも通りに起きるようにしておこうか。

そうになると、昨日今日で行けなかった買い出しに早めに行って、身体を空けておこなぎやいけない。休日前だから夜更かしして、遅い時間に起きるのもできなくなつたし、ふらつと出かけるのも、午後からになる。

デートの予定も、ショッピングの予定も、映画の予定も、何にもないから別にいいんだけど、夕方に彩夏でも誘って、今日はお休みで行けなかった居酒屋にも行こうかしら。あとでメッセージだけ送っておこう。

さて、程よく酔っ払ってきたし、そろそろTwitterとインスタでエゴサでもしようかな。ハッシュタグとか決めてないから探すのも一苦労だけど……。

ネガティブな呟きもなくはないし、半分内輪で上げている写真もチラホラあるけど、純粹に楽しんでくれてる地元の人っぽい写真、動画も上がってる。それを見ながら、一人でにやにや笑みを浮かべてビールを飲む。

誰かに見られたらヤバいなと思いつつ、連絡を取りたいアカウントをメモっていく。寝る前にDMだけ送るべきか否かを考えていたら、二本目のビールを飲み干していた。

初出 令和三年九月一〇日 小説家になろうにて公開

八月二〇日（日）

向こうの方で元気に走り回る見知らぬ子供たちを眺めながら、プラスチックのチューブに微妙に残っている、もう冷たくもないクリームを必死に吸ってみる。膨らんだ部分が一気に凹むだけで、何らかの味やフレーバーを感じるほどの量は出てこない。

私の手を離れた片割れも、風前の灯。買う前の期待感を程々に満たしつつ、「とりあえず食べた」という事実を手に入れる。既に破り捨てられたパッケージが入っているコンビニの袋へ、微かな未練を感じながら手元のチューブを放り込む。陽菜ちゃんの方へ袋を差し出した。

「いいよ。入れて。私のワガママに付き合ってもらったんだから」

彼女は「じゃあ、遠慮なく」とおずおずと空のチューブを袋に入れた。もう一方の手に持ったアイスコーヒーを口元に運ぶ。私も彼女に見習って、口の中に残った甘ったるさを流し込む。

「家で、智希くんとかこういうの食べるの？」

陽菜ちゃんは首を振った。私は両手で長めの筒を示しながら、「じゃあ、こういうの？」と訊くものの、彼女は再び首を振った。

「夏休みといえば、毎日のように一日一個はアイス食べてたけどなあ」

「智希とか、お父さんとかは食べてます。私はあんまり」

彼女は緊張を漂わせたまま、言葉を紡いだ。一緒にダンス練習をするようになってしばらく経ったと思ってたけど、まだまだそういう距離感か。お父さんの仕事仲間だと思えば、自分もそうなるな。うん。

「この後は、図書館に行くんだっけ？」

彼女は頷いた。勉強道具が入ってそうなカバンと、真新しい文房具が入っているビニール袋を提げている。

「お父さんの誕生日をちゃんとお祝いするなんて、エライね」

私の言葉に、陽菜ちゃんはキョトンとしている。

「ウチは新年早々に誕生日だから、ちゃんとお祝いはしたのは、去年の還暦祝いぐらいかな。その前は、うんと昔。もう覚えてないなあ……」

別に、彼女の年頃ぐらいにめちゃくちゃ反抗期だったこともないし、強烈に嫌いになるエピソードとかがあった訳でもないのに、めちゃくちゃ幼い頃にお祝いした記憶しか残っていない。

「だから、文面なんて何だつていいと思うよ。愛娘から手紙なんでもらったら、額縁に入れて飾るんじゃない？」

陽菜ちゃんは若干引き気味の表情を浮かべているが、あの武藤さんなら、そういうリアクションをとつてもおかしくない。何なら、お呼ばれもしてないけど、受け取る瞬間の映像を記録に残したくなってきた。行けるメンバーにこつそりお願しようかしら。

一人で妄想を抄らせていると、陽菜ちゃんの目付きがだんだんじつとりしてくる。

「何の参考にもならなくてゴメンね。さっきのパピコはお詫びも兼ねて……」

無言の圧が徐々に高まっている。私が「そういう仕事」をしているのは知っていて、そういう仕事故のアドバイスを期待しているのも分かっているつもりだったけど、思いつき期待外れに終わってしまったらしい。

「と、とにかく、短くてもいいから心を込めて書いていたら大丈夫」

下手にアドバイスしてもアレだし、中身もアレコレ言えないし。陽菜ちゃん、そんな目をしてみたところで私にできる助言はコレぐらいしかないのだ。分かっておくれ……。

初出 令和三年一〇月八日 小説家になろうにて公開

九月六日（水）

普段なら、お昼を食べて少しうつらうつらしていきそうな時間帯。今日は「女帝」との謁見のおかげで、睡魔の影も形もない。以前とは違う調度品、家具の配置も全く違うのに、彼女が座っている席は、最初から彼女のために用意されたかのようにピッタリだった。

従来と異なるのは、従者となる仲間が私以外に三名もいること。チェックされている書類こそ私の仕事ではあるものの、紙が擦れる音しか聞こえない緊張感漂う空間に、近そうな立場の人間がいるのは心強かった。

永遠とも思える時間が過ぎ、女帝、朋子さんは手元の紙面から顔を上げた。

「うん。良いんじゃない？」

女帝の言葉に、止まっていた時間が動き出した気がする。ここで素直に受け止めて、無防備になるのは早計だ。小躍りしたくなる気持ちを抑え、固唾を飲んで次の言葉を待つ。

「実際の誌面は、もう少し小さくなるのよね？」

朋子さんは、もう一度A3の見開きを穴が開くように見ながら言った。私は「ええ、もう一回り、二回りほど小さくなります」と応えた。緊張のあまり、最初の

「え」は随分上擦ってしまう。目の前に置かれたカップをこっそり手に取って、ちよつと冷めた紅茶を一口飲む。

「インタビューも写真も、とつても良いわ」

朋子さんの「ねえ？」と同意を求める言葉に、隣に座っていた沙綾さんが気楽そうに頷いた。彼女は「レタッチもいいじゃん」と付け足した。

「可愛く撮ってもらって良かったね」

沙綾さんは、向かいに座っていた瑞希さんに笑いかけた。もう一度、「ね？」と私の向かいに座っている上坂さんに言う。

「私の場合、いつも通りですけどね」

上坂さんは自信たっぷりに言った。そんな彼女の振る舞いに、女帝は満足げな表情を浮かべている。私の隣で緊張が移ったのか、瑞希さんはいつもより縮こまっただけ見えた。

「ヒイラギの告知も、コビトカバちゃんねるの告知も載せてくれるんだ」

沙綾さんは、朋子さんの手を離れた見本に目を通していた。記事の末尾を見やすいようにして、瑞希さんの前に差し出す。そこには、彼女たちが運営しているアカウント名と、そこへ飛ぶためのQRコードが入れてある。

「いよいよ、人気作家の仲間入りだね」

沙綾さんの明るい声に、瑞希さんの目にも光が戻ってくる。

「フリーのタウン誌なんで、影響力はそこまでないんですけど」

「そんなことないわ。地域密着で長年やってるんだもの」

朋子さんは私に「自分たちの影響力を卑下しないの」と付け加える。

「誇りと自信があるから、私のところに持つてきたんでしょ？」

女帝の言葉が一々突き刺さる。さっきまで想定していなかった角度から、守りの薄いところを突かれた感じ。座つてなかったら、腰から碎けていたかもしれない。

心の中のざわつきを、必死になんでもないフリを装って落ち着かせる。

「お二人は、コレで大丈夫ですか？」

一番重要な、インタビュー記事に出ている二人の承認がまだ取れていない。上坂さんは即座に「大丈夫です」と快諾してくれた。瑞希さんは、微妙に納得がいかないところもあるのか、渋々といった様子で頷いた。

「上坂さんと瑞希さんには改めてデータをメールするので、もし、気になるところとかあれば遠慮なく言ってください」

私はこの後の手続きを説明しながら、瑞希さんの様子が延々と気になってしまった。

初出 令和三年一〇月一二日 小説家になろうにて公開

九月三〇日（土）

「随分悩んでるじゃないか」

そう言う透は、全く悩む様子もなく、能天気ビールを口に含んだ。

「悩みもするよ。私のせいで色んな人の人生狂ってないか、気になって」

「うん。狂ってる、狂ってる」

彼は手元のフリーペーパーをめくりながら、私の顔も見ずに言う。

「オレも野村も、お前のせいでこうなってるからなく」

フリーペーパーを最後のページまでめくった透は、ソレを卓上に戻して、代わりに分厚い雑誌を手を取った。

「でもさ、そんなお互い様だろ。オレもお前の人生を狂わせてるかもしれない」

彼は誌面からチラッと顔を上げ、私の目を見て真剣な表情を作ると、急に吹き出した。

「ダメだダメだ。お前と真面目な話はできないわ」

笑いながら、顔の前で手を大きく左右に振る。一呼吸置いて息を整えながら、ビールの隣に置いてある和らぎ水を一口飲んだ。グラスをおいて、もう一度ゆっくり息を吐く。ようやく落ち着いたらしく、フリーペーパーと分厚い雑誌を揃え、鞆の中に仕舞った。

「汚れちゃ悪いよな」

フリーペーパーの裏面も確かめて、グラスについていた水滴なんかでシワができていないか、入念にチェックしてくれる。

「コレは後でゆっくり読むよ。感想もその時に送るわ」

彼は鞆の口を閉め、話題に戻るためのおまじないかのように、ビールに口をつけた。

「仮におまえのせいで何かが変わったとしても、その後どんな選択をするか、どんな行動を取るかは、その人の責任というか、自由だろ」

「それはそうなんだけど、大事な人の人生を壊しちゃってる気がしてさ」

透は「ふくん」と言ったきり、枝豆の山から一つ摘んで食べた。

「私なんか気にしないで、やりたいようにやって欲しかったな〜って」

「それは流石に望み過ぎだろ」

彼は空になったサヤをガラ入れに放り込み、次の枝豆を手にとった。

「職場の人か、取引先か、お客さんか、詳しいことは知らんけど、大事だと思える人がいるなんて、幸せなことだろ」

そんな話を、家に帰れば「大事な人」がいる透にコンコンと説教される。少なくともこの構図は地獄な気がする。

「それを、自分のワガママで変わらないで欲しい、とか望むのは欲張りすぎるわ」

「別に私のワガママで言ってるんじゃないかって」

「いいや、ワガママだね。でなきゃ、子供の屁理屈だ」

彼は手に持ったままだった枝豆を口に入れ、グラスに残っていたビールを飲み干した。隣のテーブルに料理を運んできた店員さんを呼び止め、お代わりを注文している。ついでに私はレモンサワーを注文した。

店員さんは空きのグラスも回収して一階へ降りて行った。

「欲張りすぎると身を滅ぼすし、考えすぎは身体に悪い」

透は、すっかり冷え切って誰も箸をつけていなかった、一個だけ残っていた唐揚げに手をつけた。

「大して賢くもないお前が一人で悩んだって、大した答えなんて出ないんだから、考えるのも悩むのも、時間の無駄だよ。それを理由に飲めるのは良いことだけど」

彼はテーブルに運ばれて来たビールを受け取り、店員さんに「ありがとう」とこやかな笑顔を向ける。早速一口飲んで、喉を湿らせるなり口を開いた。

「お前は難しいこと考えないで、自分がやりたいようにやればいいんだよ。バカ丸出しで、自由奔放にさ」

「誰がバカだ。誰が」

私は拳を固く握って、透の肩に思いっきりパンチした。さっきまでにこやかにしていたムカつく顔が、いい感じに歪む。本気で痛そうに振舞う彼を見ると、自分の悩みは随分軽くなって来たように思う。そういう生き方しかできないんなら、そういう生き方ですべていいもの、ありなのか……。

初出 令和三年一〇月一七日 小説家になろうにて公開

一〇月二日(月)

お昼過ぎにオフィスを訪れたときには在席していた香織さんは、夕方前には帰宅した。打ち合わせを終えて上長向けの資料を作り始める頃には、仲良し女子大生三人組がタイムカードに退勤時刻を打っていた。

上長からの返事を待ちながら、私は打ち合わせスペースの方へ目を向ける。武藤さん、森田さんと哲朗くんたちの白熱した会議はまだまだ終わらそうにない。

私は、隣で動画編集に勤しんでいる瑞希さんの横顔を何となく眺めていた。動画サイトへの投稿が完了するのを待ちながら、隙間時間を上手に使っているらしい。可能なら私もオフィスへ戻って、溜まっている事務作業を処理したいところだけど、上長から「武藤さんへの伝言があるから」とのメッセージに、この場を動けずにいる。

せめて、内容だけでも送ってくれたらメモを残して動くのに。チャットツールに目立った動きは特にない。

「返事、まだないんですね」

瑞希さんは左耳からイヤホンを外しながら、話しかけてくれた。彼女は作業の手を止めずに、壁の時計に目をやる。

「この時間だと、忘れて帰っちゃってるかも。一回、オフィスに電話しちゃうとか」

瑞希さんの言葉に、「流石にそれはない」と言いかけるものの、断言できないと思って取り下げる。「じゃあ、ちょっとうるさくするけどゴメンね」と彼女に断りを入れ、少しは静かそうな窓際の一角に移動した。外の廊下に出ても大して変わらないし、ここでボリュームを抑えてしゃべる方がマシでしょう。

事務員さんが帰っているのか、数コール待つてようやく誰かが出てくれた。電話口の同僚に、上長の行方を確かめてもらう。しばらく保留の音楽を聴きながら待っていると、上長は既に退社しているとのこと。感謝を述べ、私もこのまま直帰する旨を伝えて電話を切った。

定時をとくに過ぎていたとは言え、返事の一言ぐらい返して欲しかった。元の席に戻り、チャットツールで上長宛に、伝言は後日受け取る旨と、定時を過ぎ

たので直帰する旨を伝え、私のステータスを「離席中」に変更してツールを終了した。

日報をチャチャッと出して、オンラインで「退勤」ボタンを押す。

私の隣で作業していた瑞希さんは、動画サイトの設定画面を開いて、作業していた。タイトルやらサムネイルやらを設定して、公開する時刻も指定して設定を保存すると、その画面もブラウザも閉じてしまった。

デフォルトの壁紙になっているデスクトップを、ゆつくりと閉じる。一瞬、打ち合わせスペースの方へ視線を送るも、すぐに目を逸らしてノートパソコンを片付け始めた。

私も遅れないように帰り支度を整え、何となく彼女の支度が終わるのを待つ。

瑞希さんは机上のペンと哲朗くんの机にあった正方形の付箋を引き寄せると、大きめの字で「先に帰ります」と私の名前も添えて書いてくれた。

それを哲朗くんの机にあるモニターに貼り付け、ペンと付箋を元の場所に戻してからスマホを取り出し、誰かにメッセージを送信した。

「さ、帰りますか」

瑞希さんはさつぱりした様子で、柔らかい笑顔を私に向けてくれた。私は「お先に失礼します」と一応声を出し、返事を待たずに瑞希さんとオフィスを後にした。

初出 令和三年一〇月二〇日 小説家になろうにて公開

一月四日(土)

たまにしか見ない土曜日朝の番組も、今月はほぼ毎週見るんだらうなと脳裏をよぎった。チャンネルは同じなのに、平日とは微妙に違う構成に、時間を間違えそうになる。

一食パンをかじって、三個一パックのヨーグルトを一つ食べ、インスタントのコーヒーといういつもの朝食は済み、二杯目のコーヒーを飲むか、歯を磨くか少し悩む。でも、コーヒーは道中でも隙間時間に飲むかもしれない。変にバタバタするぐらいなら、今から片付けて早めに出よう。

ゴミを片付け、お皿とマグカップを洗って水切りカゴに伏せた。洗面所で自分の顔や髪型を確かめながら、歯ブラシを手に取った。食べる前にメイクを済ませ、着替えも半分ぐらいは終わっている。家の中専用の防寒着を脱いで、下を履き替えれば、あとはジャケットとコートで外には出られる。

で、何を持っていくんだったつけ。昨日とほぼ同じ荷物がカバンの中に入っている。昨日持って帰ってきた飲みかけのペットボトルつて、その後どうしたんだつけ。今日は関係者パスと社員証ぐらい持っていけば、あとは何とかなるか。

歯磨きを済ませ、口を濯ぐ。もう一度鏡で自分の顔を確かめ、鏡と洗面台の汚れを気かけながら、電気を消してリビングへ戻った。カバンの中に入ったままだったペットボトルを取り出し、少しだけ残っていた飲み残しを一気に飲んだ。フタとラベルは燃えるゴミにして、ペットボトルは軽く濯いで窓のところに置いた。前から並んでいるビンや缶も、一回そろそろ袋に分けて捨てるように準備しなくっちゃな。

テレビの時計に目をやると、七時四二分。そろそろ着替えて出かけなくては。忘れ物がないように、もう一度カバンの中を確かめる。社内用ケータイも、お財布もちやんと入っている。昨日から入れっぱなしの物も全部あるし、問題ない。

先に下を履き替え、防寒着を脱いでブラウスに袖を通した。パパッとボタンを閉めて、ジャケットにサッとブラシをかける。裏と表を一応目視してから、ジャケットを羽織った。

傘は多分必要ないと思うけど、どのコートを着ていくべきか少々悩む。でも、

昨日の帰りは寒かったからなあ。日中はどうせ日向だし、着ないつもりでちよつと厚めの方にしよう。

ジャケットのボタンを閉め、コートを羽織る。テレビをリモコンで消して、戸締りと電気の消し忘れを確かめて外に出た。ひんやりした空気に頭がキリツとしてくる。世間的には三連休の中日。いつもの住宅街より、さらに人が少ない気がする。

それでもすれ違う近所の愛犬家に時折挨拶をしながら、南茨木の駅へ向かった。人通りの少ない歩道を、自転車で駆け抜けていく。漕げば漕ぐほど風が冷たい。

住宅街の細い道を、右に左に折れながら西に向かう。途中の小学校や公園で、やる気に満ち溢れた少年野球チームや、気合の入った近所のスポーツマンが、まだ八時前だというのに、本格的に活動し始めていた。

その爽やかなやる気の後押しされながら、桜通りも横切り、貨物の高架も潜つて駅に辿り着く。駅前の駐輪場に自転車を預け、モノレールの駅を目指した。次のに乗っても、着くのは恐らく八時半。

「ま、ゆつくり行くか」

多少早くても何とかなるでしょう、と寒さにちよつぴり震えながら、自分に言い聞かせた。

初出 令和三年一〇月二九日 小説家になろうにて公開

一月三〇日（木）

前の予定が微妙に早く終わり、約束の時間にはまだ大分早い。とはいえ、一度自宅に戻ってから、もう一度出直してくるには微妙な時間。近くの喫茶店で時間を潰すぐらいなら、ダメ元で聞いてみよう。

カバンから社内用ケータイを取り出し、Zサイズのオフィスへ電話をかけてみる。香織さんが少々他所行ききの声で電話口に出た。

「あら、ルミちゃん。お休みじゃなかったっけ」

「休みは休みなんですけど、武藤さんと約束してて」

私はこの後のアポイントについて香織さんに説明すると、武藤さんは外出中らしい。

「私もそろそろ、お昼休憩に出ちゃうけど……」

香織さんはそこで言葉を切ると、電話の向こうで「哲朗はいる？」と聞いていた。送話口を塞いでいるのか、微かにくぐもったやり取りが聞こえると、香織さんの声が再びはつきり聞こえてきた。

「哲朗はいるらしいから、何時来ても大丈夫よ」

「わざわざ、すみません。ありがとございます」

香織さんは「いえいえ」と出た時と同じく、良き母親っぽい声で別れの挨拶をして、受話器を置いた。

哲朗くんがいるのなら、何か要るものがないか訊けば良かった。差し入れというほどでもないけど、途中のコンビニで無糖の炭酸水でも買って、持って行ってあげよう。彼がいらないういうなら、この後の水分として持ち歩けばいい。

JRの駅前商店街を抜け、途中のファミリーマートで五〇〇mlの炭酸水を一本買った。会計を済ませながらスマホで時刻を確かめると、当初の予定よりまだ三分ほど早い。何時でも大丈夫と言ってたし、言葉を信じてオフィスへ行ってみよう。

意を決してビルの中に足を踏み入れ、そのままZサイズのオフィスまでエレベーターで上がる。ドアの前までくると、電気は間違いない点いていた。普段ならそのまま開けて入るけど、一応三回ノックして「失礼します」の声と共にドアを

開いた。

目隠しになっている棚の向こうから「はくい」と声が聞こえ、棚をグルッと回って哲朗くんがドアの前までやって来た。彼は私の顔を見るなり、「ああ、どうも」と微笑んだ。

「新刊の受け取りですよね〜」

彼は「どうぞ」と応接スペースへ私を誘導し、オフィスの隅に積み上げられている段ボールの方へ向かった。その背中に「誰？」と女性が問いかけると、彼は背中を向けたまま、「ああ、小野寺さん」と答えた。

哲朗くんと入れ替わる形で、上坂さんが応接スペースへ顔を出した。私が「こんにちは」というと、あちらも同じく「こんにちは」と会釈し、哲朗くんの方を見た。

「ねえ、お茶つて入れたほうがいいの？」

「ああ、いいのいいの。すぐに帰るから」

上坂さんの問いに哲朗くんが答える前に、私は身振りも合わせて断った。手に下げていたビニール袋に炭酸水が入っていたことを思い出し、それを上坂さんに差し出した。

「一本しか買ってないんだけど、差し入れ」

上坂さんは「どうも」と受け取りながら、ヒイラギの最新号を持ってきた哲朗くんの方を振り返る。彼はその視線を受け止めながら、私に「ありがとうございます」とお礼を述べてくれた。

「コレ、ですよ。一冊で大丈夫でした？」

彼は「一言言ってくれば、自宅まで届けたのに」と言いながら、新刊を差し出した。私は「一冊で、大丈夫」と頷いて、それを受け取る。パラパラと中身に目を通し、少々重みのあるそれを、カバンに仕舞った。

視線を感じて顔を上げると、哲朗くんが私の方をじつと見ていた。

「なんか今日、雰囲気違いますね」

「そう？ いつもと一緒だよ」

いつもと違うところがあるとするれば、今日は完全にプライベートな服装という程度。

「あ、もしかしてデートですか？」

哲朗くんの横で冷静に私を眺めていた上坂さんがボソツと呟いた。哲朗くんは、「え、そうなんですか？」と少々驚いた様子で言った。

「だって、髪型とかメイクとか」

「あ、確かに。今日はより一層、綺麗というか可愛いというか」

「上坂さんの分析に、哲朗くんが頷きながら同意する。全然そんな予定はないけど、褒められる分には悪い気はしない。このままいい感じに、サツと引き上げねば――」。

初出 令和三年一月一日 小説家になろうにて公開

二月二〇日(水)

さつき届いた衣装を着てから、年季の入った姿見の前に立つ。鏡面が埃まみれで、鏡としての機能を満足に果たしていない。適当に拭いて衣装にホコリがつくのも嫌だなと思っていたら、彩夏が代わりにキッチンペーパーを持って来てサツと拭いてくれた。ホコリが舞わないよう、上手に畳んで中へ織り込んでいく。

普段使わないところは当然のように掃除が行き届いていない。見ないフリをして来たけど、見てしまったからには近いうちに気合を入れた大掃除をしなくては。
「ほらほら、前見て」

姿見のフレームに積もったホコリやら、部屋の隅に気を取られていた私に、彩夏が声をかけてくれた。私の肩を叩いて、鏡の方へ向けと指で差し、自分は鏡に映らないよう脇へ避けて座った。できることなら直視したくなかったけど、えいやと気合を入れて、自分の装いを確かめる。

「うわあ、ええー」

着る時から随分短いなー、肌の露出が多いなーと思っていたけど、改めて向き合ってみると、かなり攻めた衣装になっている。ザ・サンタな赤基調のミニスカ。量販店で手に入る大人なアレとは違って、生地も作りも大分しっかりしていて、それなりの値段なんだろうな、という印象もある。

左右に体をくねらせて、後ろの感じも確かめた。ただでさえ短いスカートが、かなりヒラヒラと頼りない。

「コレだと、完全に見えるよね？」

鏡越しに、彩夏に同意を求めてみる。彼女はそれに応えず、衣装が入っていた箱の方へ行き、中に残っていた物を持って来た。

「あ、見せパン」

赤いスパツスタイルのアンダーズコート。今日は履かないけど、当日はコレも着けるのか、とマジマジと眺めてしまった。ミニスカサンタのコスプレというか、チアガールの特殊な衣装といったところか。

背の高い沙綾さんや、出るところが出てる彩夏なら似合うだろうけど、背もそんなに高くないちんちくりんの私や、細身の瑞希さん、陽菜ちゃんには荷が重

そうだ。ま、当日は踊る方に必死で、他のことを考えてる余裕なんてないだろうけど。

姿見の前で自分の姿をアレコレ確かめている私を見ながら、彩夏はニヤニヤと微笑んでいた。彼女の後ろに、私が受け取ったのと同じの、未開封の箱が置いてある。

「彩夏は着ないの？」

彼女は頷いて、「ルミが着てくれたから、どんなもんかもよく分かったし」と言った。

「サイズとかもあるし、合わせとかなくて良いの？」

「うん。大丈夫」

私のところに届けられた荷物ではあるものの、箱にはきちんと「野村彩夏様」と宛名書きがされていた。取り違えがなければ、それぞれに合わせたサイズの衣装が入っているのだろう。

確認も済んだし、彼女が着替えないのであれば、さっさと元の服に戻ろう。一人でこんなのを着ていると、だんだん恥ずかしくなってくる。彩夏が持つて来た見せパンを箱に戻し、脱衣所へ行こうとすると、彩夏に呼び止められた。

「もう着替えちゃうの？ 可愛いのに、もったいない」

「自分は着ないんですよ？」

「誰かが着てるからいいんじゃない」

彩夏はスマホを取り出して、私に向けた。「ほら、可愛いよ」と言いながら、次々にいろんな角度から写真を撮っていく。私は「コラ、やめろ」と止めようとするが、彩夏に上手く躲されてしまう。

「コレなんか、良いんじゃない？」

彩夏は写真を私に見せながら、意地悪な笑みを浮かべている。どこにアップして、誰に送るつもりだ？ 先に着替えて、データの奪取を考えよう。まずは脱衣所へ行って着替えねば。

二月三日(日) 午後一時

スーツケースを引きながら、三階までエスカレーターで上がる。頭上の、年季の入ったからくり時計は、二体のピエロが一三時ちょうどをお知らせしてくれた。お店の名前が変わっても、大規模な改装工事が入っても、ずっと残っている。

動いている姿も見られてなんとなくジーンと来ていると、フードコートの方から声がかかった。そちらを見ると、透と奥さん、お子さんがご家族でお昼ご飯を食べていた。

「大層な荷物だな。今から旅行か？」

透は後ろのスーツケースを見て言った。私は、隣の奥さんに「こんにちは」と会釈をする。微妙な気まずさを感じながら、私は首を振った。

「二、三日、実家に泊まるだけ」

「それでその荷物？」

「うっさいなー。色々持つていくものがあるの」

私は透の追求をやりわりいなしながら、フードコートの空いた席を探す。買っていくものの目星はついたものの、まだ約束の時間には少し早い。買い物ついでにここで時間調整、と思ったけど、延々と透に付き纏われるなら、外に出て向かいのサイゼリヤにでも行こうかしら。

ザッと見渡してみると、お昼時の割には割と空いている。お昼ご飯は家で済ませてきた身で、椅子だけ借りてコーヒーを飲むのは気がひけるかなと思いきや、全然そんなこともない。適当に甘味を頼んで小腹を満たしても良い。

「隣の席、空いてるぞ？」

透は自分たちの隣を指差して手招きする。たとえそこしか空いていなかったとしても、わざわざそこに座りたくはない。

「気まずいから、良いって」

できることなら、こうやって言葉を交わすのも遠慮したい。最初から他人行儀に敬語で話せば良かったと、後悔している。透は私の気持ちを汲み取ることもなく、強引に自分たちの席へ連れていく。

「悪いんだけど、俺の代わりに家族を見てて」

彼は自分の席へ私を座らせると、彼はトレイを持って返却口の方へ向かった。私はスーツケースを邪魔にならないところへ移動させ、奥様の方へ向き直る。幼なじみの奥さんやお子さんと置いてけぼりは、非常に気まずい。

「強引に、すみません」

「いえいえ、こちらこそ」

奥さんが軽く頭を下げるから、こちらでも合わせて頭を下げた。緊張に身体が自然に縮こまる。俯いていると、ベビーカーの中からお子さんが私をジッと見上げて来る。透の面影を感じながら、ジッと見つめられるのもめっちゃくちゃ気まずい。沈黙の最中、顔を上げると透が食器を返して戻ってきた。

「いやあ、悪い、悪い。助かったよ」

彼は何事もなかったかのように、奥さんに「さ、行こうか」と声をかけ、ベビーカーのストッパーを外した。

「オレたちも今からお出かけでき、バタバタなのよ」

彼はベビーカーのハンドルに手を置いて、周りを見ながら上手に通路へ出した。

「また来年、ウチに来いよ。お礼はその時にでも」

彼によって強引に座らされたはしたけど、わざわざお礼をされるようなことはしていない。私は、奥さんと何か話をしている透に、「お礼なんて良いよ」と言った。

「奥さんにもご迷惑だろうし」

「そっか。悪いな」

奥さんは私に、「すみません」と頭を下げた。透は無関心な様子で「じゃあな。良いお年を」と、ベビーカーを押ししてフードコートを出て行く。奥さんはそれを追いかけた。随分前に切れたらと思っていた腐れ縁も、どうやら来年以降も続くらしい。この厄介さを飲み込むには、甘味の一つでもお腹に入れなくては。アイスにするか、あんみつにするか、それが問題だ。

(完)

初出 令和三年一月二二日 小説家になろうにて公開